

イノベーションはリスクを伴う世界観

学窓を出て35年強。その間の社会経済情勢の変化の中で、どの職業に従事した人も大きな試練を経験しているが、中でも銀行を始め金融機関に就職した人は、入口（入社）と出口（退職）を振り返って、とても同じ職場に居たとは思えないと異口同音に言う。理由は二つある。

一つは、入口時代の電話と算盤・計算機時代から、その後の急激な技術革新に伴う瞬間・大容量取引を可能とするパソコン・携帯電話の時代への切替えである。所謂アナログからデジタルへの質を超えた変化である。

二つは、この導入された電子機器の機能を駆使して、他方で、この間の金融の自由化・国際化の進展を背景として、護送船団方式時代には考えられなかった様々な金融商品及びデリバティブ（先物・オプション・スワップ取引）が開発・導入されたことである。預金獲得競争は激しかったけれど、集めた資金をより高い金利で運用して利ざやを稼げば良かった入口時代のビジネスモデルとは一変した世界の出現である。

この二つのイノベーションが、市場・経済の自由化を伴いながら同時併行的に、かつ、短期間に急激に進行したことは嘗ってなかったのではないかと思われる。同じ職場に居たとは思えないとの感想は理解出来るところである。

ところで、このイノベーションの結果は素晴らしい、私達は、今まで体験したことのない世界を目の当たりにして驚き、賞賛し、これに乗り遅れまいとしてその習得に励み、また、その果実を享受している内に、そこに潜むリスクの存在が横に置かれたままとなる。しかし、やがて、このリスクが現実化して始めてその大きさにまた驚き、狼狽し、その過程で、一部には、イノベーションの流れや自由化自体があたかも間違っているような議論さえ生じてくる。

最近の東証での大量の誤発注、マンション設計の耐震偽装、ネットベンチャー企業による不正事件等いずれもイノベーションに潜むリスクが顕在化したものである。

この点で、さすがに、ドラッカーは“イノベーションは希望と安全に満ちた世界観ではなく、リスクを伴う世界観である”と指摘し、そして、“イノベーションは人間に対する見方を根本的に変え、危険を冒しながらも新しい秩序を作っていくもの”とも述べている。私達も、そろそろ、ドラッカーとこうした認識を共有して、リスク管理の徹底を図りながら主体的にイノベーションを取り入れていく必要がある。

そのためには、新たなリスク（甚大な被害、混乱、著しい不公平、不正）の未然防止策、監視・検査体制の構築を急がなければならない。ちなみに、上記デリバティブ自体もリスクを回避・緩和・転嫁する手段と位置付けられる。

こうしたリスク管理の徹底を図りながらのイノベーションの導入に当たって、広く関係者への迅速で公平な情報開示が、その大前提であることは云うまでもない。

（理事長 堤 英隆）